

ら若干増えた。

今年度も、十勝市場の取扱高は肉牛次第だ。「4月の取引を見る限り、17年度と同じような水準だった」(ホクレン帯広支所)。肉牛価格の急落を懸念する声は、今のところ少ない。

農業ガイド1156号

2018年5月12日

黒毛和種の子牛取引数 ホクレン十勝 全国一 生産基盤の強さ背景

農畜産業振興機構(東京)が2017年度の黒毛和種の子牛取引状況をまとめ、ホクレン十勝地区家畜市場(音更町)が年間取引頭数で全国一だった。頭数は1万4339頭と16年度から5%減ったが、2位の曾於中央家畜市場(鹿児島県)を360頭上回った。平均取引価格は約76万円。16年度より値下がりしたものの、畜産家の生産意欲が減退するほどではないとの見方が多い。

◆黒毛和種の子牛取引頭数ランキング(2017年度)

順位	所在地	取引数(頭)	平均価格(円)
1	ホクレン十勝地区	1万4339	76万1330
2	曾於中央家畜市場	1万3979	81万1474
3	ホクレン北海道	1万3071	76万8932
4	小林地域家畜市場	1万2627	78万3376
5	肝属中央家畜市場	1万2104	80万7724
6	都城地域家畜市場	1万2077	78万2712
7	みやぎ総合家畜市場	1万1882	75万4551
8	中央家畜市場	1万1384	73万3593
9	熊本県家畜市場	1万0400	75万0233
10	福島県家畜市場(全農)	8354	78万4118

ホクレン十勝地区市場では管内で育った生後9カ月程度の子牛の出品が多い。振興機構によると、17年度は毎月1000頭以上の取引がコンスタントに成立した。雌が合計6692頭、雄が7647頭だった。

黒毛和種は長く九州が主産地だったが、ここ数年は十勝地区市場の存在感が高まっている。生産基盤が強固であるほか、乳牛に黒毛和種の受精卵を移植し、効率的に生産する手法が定着しつつあるのも背景だ。

落札された子牛は道内外の酪農家に肥育され、ブランド牛として流通するものも多い。ホクレン北海道家畜市場(胆振管内安平町)などを含む道内の取引頭数は3万418頭で、全国の約1割を占める。都道府県別で見ると鹿児島(6万3284頭)、宮崎(4万8911頭)がなお多い。

平均取引価格は、高騰した16年度(約82万円)から6万円ほど下がった。子牛を肥育する農家の収入の目安となる枝肉価格の上昇が頭打ちとなり、子牛価格も影響を受けた面が大きい。もっとも急騰前と比べると「なお高い水準を保っている」(管内農業関係者)との見方が大半。価格は当面、底堅く推移しそうだ。



1月の初競りでは税込み120万円の取引も

農業ガイド1156号

2018年5月12日

畜産 規模拡大進む 牛は過去10年最多 17年統計

十勝農協連(山本勝博会長)がまとめた2017年の十勝畜産統計によると、管内では飼養頭数が増える一方、飼育戸数は減少し、規模の拡大が進んでいる状況がうかがえる。乳牛、肉用牛を中心に管内の動向を紹介する。

◆乳用牛

乳牛の飼育戸数は前年比1.7%減の1326戸。生乳出荷戸数は27戸減少し、1185戸。年間の出荷乳量で見ると1000トン以下が23戸減の869戸となる一方、1001トン以上は316戸で全体の27%を占めた。35戸が搾乳を中止し、うち19戸が経営転換、16戸が離農した。離農の理由としては後継者不足が9戸と最も多かった。

飼育総頭数は2.1%増加し、22万6058頭。中でも育成

牛が4.3%増え、10万921頭となった。1戸当たりの平均飼養頭数は3.9%増の170.5頭となっている。

経営体別では個人経営が35戸減の1120戸。このうち101~200頭を飼っているのが最も多く33.4%を占めた。法人経営は12戸増え206戸となった。

年間生乳生産量は1.1%減の114.8万トン。経産牛1頭当たりの乳量は9177キロで1.5%減った。生乳出荷農家1戸当たりの平均年間生産量は969.1トンと1.1%増加した。アウトサイダー乳量は1.3万トンと8.1%増えた。